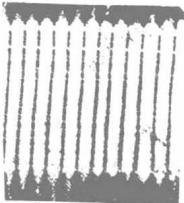
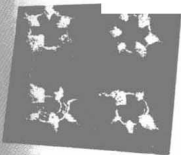


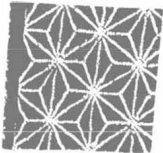
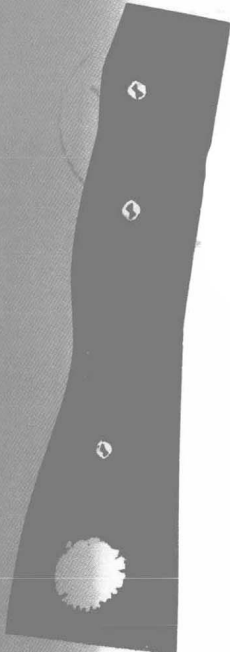
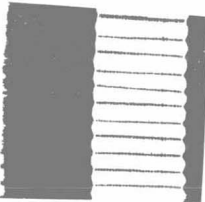
藍
に
生
き
て





藍に生きて

あい
み ふね
御船テル子・作
かみやしん・絵



理論社

作者 御松テル子（みふね・てるこ）

一九三七年横浜に生まれる。日本児童文学者協会会員。JBBVY会員。

これまで、児童文学の作品論、作家論、文体論、読者論などの評論を多く発表してきた。

住所 愛知県春日井市藤山台九一―一三―一三

画家 かみや しん（上矢・津）

一九四二年東京に生まれる。

絵本作品に『つぐみのくる森』（小峰書店）『ゆうやけがみたくって』（講談社）『そらとぶこいのぼり』（金の星社）、さし絵の仕事に『おにいちやんげきじょう』（理論社）『小さいたねみつけた』（小さいベッド）（偕成社）『黄色いかばんをおいかける』（童心社）『ふるさと行きの汽車が来る』（文研出版）など多数。

住所 埼玉県比企郡鳩山町石坂

六六四―一〇七七

あいに生きて

作＝御松テル子

絵＝かみや しん

NDC913 A5変型 20cm 342p

ISBN4-652-01413-9

1986年5月第2刷発行

発行所――株式会社 理論社 発行――山村光司

東京都新宿区若松町15-6 電話 03(203)5791 振替 東京9-95736

©1985 Teruko Mifune, Shin Kamiya Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

本文印刷／加藤文明社 製本／誠製本 定価1200円

一片の布。

黒い色は沈む。

紅色ははなやぐ。

藍の色はにおう。

きものをつくる。それを着る。

からだのぬくもりがきものにしみわたるころ、

人は布に心まで包まれてしまっていることに気づきはじめる。

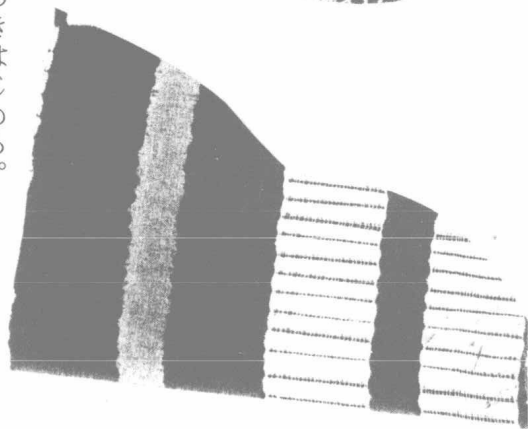
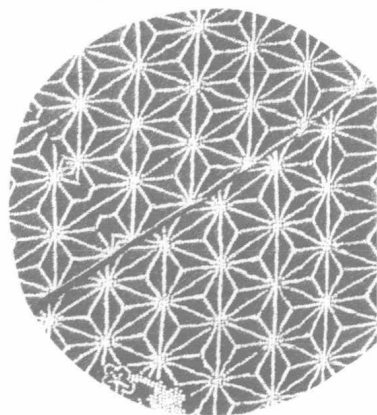
二千年もの昔から古代びとの身を飾り、

今なお咲きあふれている着物の模様がここにある。

この手でなでてみる。恥じらって縮んだ。

生きているのだ。

名は絞り染。



藍^{あい}に生きて——もくじ

一 火事だ！—— 5

二 りゆう生まれる—— 17

三 はじめてのスマレ—— 24

四 鹿^かの子結^{こゆ}い—— 38

五 権力^{けんりき}のしるし—— 52

六 全機^{ぜんき}和尚^{おしょう}のもとへ—— 67

七 尾張藩^{おわりはん}の印—— 81

八 いつけたのはだれか—— 91

九 夢^{ゆめ}では困^{こま}る—— 106

十 白生^{しろき}地^じ四反^{たん}—— 123

十一 約 束—— 136

十二 年の暮^{くれ}—— 150

そうてい・さしえ
かみやしん

十三 藍^{あゐ}は生きもの——163

十四 ミナの宝物^{たからもの}——177

十五 一世一代の決心——194

十六 りゆう絞^{しほ}り——207

十七 夏祭り——220

十八 はじめての取り引き——236

十九 麦踏^ふみ——251

二十 「よろこべ、千之助^{せんのおすけ}」——265

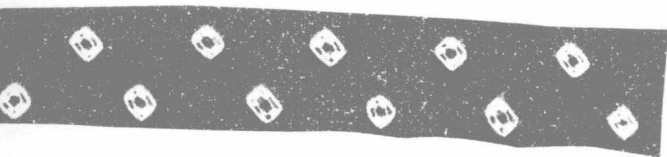
二十一 ねむれない夜——280

二十二 幸せは降^あつてはこない——286

二十三 雪景^{ゆきげ}色^{しき}——299

二十四 旅立ち——312

二十五 いっしょに——326



一 火事だ！

深い軒、うす暗がりの店の奥、絞商山代屋の大番頭は、それまで猫背でかかえこんでいた算盤を、急にパンとはらってご破算にした。

「いいぞ、花見晴れだ！」

暗がりからとつさに明るい街道に出て日がまぶしいのか、両眼に力を入れてしばらくと、意地わるそうなしわが、まなじりにこびりついていった。

「そうーれ、出かけるぞ、花見だ、花見だ！」

語尾は上がって、そばの猫まで追いたてた。店名へ山代屋の文字を両衿に染めぬいた紺色の印半纏を着こみ、足もとは雪駄ばき。豆絞りの道中手拭を首にかけた大番頭が、露はらいをかつてで、一行の先頭きって歩きます。

おだんな、大旦那、山代屋当主はだれより肩幅が広い。ちよつと見には木綿に見えるやたら縞の柄、よく見れば実は絹、なんとも贅沢な紬の長着をしゃきつと着こんでいる。それにつづく番頭、手代、丁稚、いつも

より大きめの髷まげを結ゆい上げた、びんつけ油あぶらのにおいそうな奥女中おくじやうちゆう、ひつつめ髪かみの女子衆おなごし。思い思いせいっぱいの晴着はるぎを着きながしている。指ゆびを折よってみる、総勢二〇数人そうぜいもいようか。男おとこたちはすでに迎むかえ酒さけが入いっているのか、店働みせわきのきのときよりずっと声も身ぶりも大きい。

尾張国愛知郡有松村。

絞りしぼの里は村中どの家も、絞り染しぼぞめの反物たんものができあがっていくための歯車はぐるまを、日ねもすまわしつづけて暮くしをたてている。絞り染しぼぞめは数ある模様染いようぞめの中では比較的ひかくてき、取扱とりあつかいやすい工程こうていでできていく染法そめほうだ。白生地しろじの布ぬいを二本の指ゆびでつまんでは糸いとで一つ一つくるくると括くり、引きしめて、染液そめぎの中なかにつけ、乾かわかし、後にそのくくり糸いとをほどけば模様ようが浮うかび出る。古代こくたいから行いわれている染めである。

今日も街道の外あかりを頼たよりに、家の軒先のきさきの板いたの間にすわって単調な手先仕事てさきしごとをくりかえしていた通りばたの家の女たちは、外でのにぎやかな音おとにふと手をとめ耳みみを立てた。

「今年もそろそろかと思おもっていたけど、やっぱり花見はなみか」

板戸いたどを細く開ひらけて、覗のぞき見みするくくり女の声こゑが、とんだ。

「括くっけていても腰こしが浮ういてしまつて。さすが有松一しやういつの絞商しやうかう、山代屋やましろやさまのお花見はなみだねえ」

「あの花見小袖こせでの手のこんだこと、ようく見てごらんよ、絞りだけじゃなくて縫ぬいとりまでしてあるつて。おお、きれい！ 花よりこつちにはればれだわ、なあ」

「去年は帰りにや雨。傘かさもささずに見事な小袖こせでぬらして、お手柄てがらそうに帰かへつてきたけど、今日は雨じゃなくて風かぜやわ、きつと」

「どうりで今日は朝からよう、くくり糸いとが切れる。よっぽど空気が乾かわいとるのやわ」

「花に風か」

「なに氣きどつたこと言いうてんの。……それにしても去年にましの豪勢ごうせいぶり、まあ見てごらんよ、丁稚ぢやち

が下げてゐるあの花見弁当の重ねのたつぷりしていること、中味はさぞかし大ご馳走だろうよ、はんぺん、かまぼこ、鯛に……」

くぐりの木綿糸がめりこんで指先が割れ、血の筋が走っているのを、女はべろりとなめて袖の下にかくした。

「今年はいつもの年よりも、たとと売れたって言うからね。わたいらには関係ない話やけどね」隣りの女も相変わらずへつぷり腰で、戸から顔だけのめり出して返答している。

「番頭の酒の入った赤い鼻、いよいよ高くなっちゃってさ。いつもの横柄さ。飛び出して、へし折ったら気もちよからうね」

「ああら、おんなし気もち。昨日だって、くぐりが不ぞろいだからって、文句のはてに不上りだよ。金ほもらえずじまい。やだねあの鼻」

「鼻？ あちらさまは花だよ」

「はなははなでもさくらの花か、ははは……」

笑いにも力がぬけた。女の白毛まじりの髪はかさついて齒の欠けた木櫛がおちた。

「やだねえ、櫛がおちるなんて、縁起でもない」

「風の向きが悪いんだよ」

目を移すと、桜の花は遠く隣り村、桶狭間の丘にこんもりと、うす墨色にけぶって見えた。それにしても折から吹きはじめた風はどうも意地悪い。

「ああ、行っちゃった、もう見えん。花見に出かける他人さまの道中なんぞ見とらんと、一粒だってたくさん括らにや、飯の食い上げ、食い上げ。さあさ仕事仕事」

声は決してしめつていない。

「貧乏人にはそれが一番だもんね。おたがいに」

おたがいに、の一言に二人の眼はうなずき合つて笑つた。隣り同士の板戸から顔だけつき出しての会話は、ぴしやりと閉められた戸といっしよに、それぞれの家の中に引こんでしまった。通りを風が吹きぬけた。

肩で風切つて街道をぬけ丘にのぼつた山代屋連は、畳表に黒布でへりをつけたうすべりを広げると、円座を組んでどつかと腰をおろした。男子衆の羽織に細引きを通し、桜の枝と枝に結びつけて飯の幕を仕立てて席がつくられた。鳴物入りで大番頭は、大旦那の口から、耳をたよりで憶えたにわか淨瑠璃を、顔ふくらませてうなつてみせ、座をにぎわす。おもむろにとり出された朱塗りの盃、三段重ね。一番下は直径一尺五寸もあろうか、手はのばされて、まずは大旦那の前へ。大番頭は、

「よいお日和で、お花見のお伴ありがとうございます。まずは……」

言いかけるなり酒一升をなみなみとつぐ。とくとくと音が立つ。盃は丸鏡をつくつて、映つた大旦那の顔はゆらゆらり。両手でおさえて一息にあおつた。

「さあ、みんなもやってくれ、今日のところは」

宴はいよいよ。

「それではやらせていただきます」

深々と一礼。

「この桜に酔わんことには、人に生まれたかいいもないというもんだ、年に一度だ、さあさ飲んだ飲んだ」大番頭は声高に言つて、ふらつく腰で人の輪をかきわけ、吹く風で脚にからむ着物のすそを、ひよいとまくつて角帯にはさむと、三度目の酒をついでまわつた。かけ合うあいさつもはずんでくる。

「お流れ頂戴」

「ご献盃」

五十代半ばで油ののっている大番頭とは、日ごろの仲がしっくりしない、六十もとうに越している二番番頭が、さした盃を受けとらず別の人にまわすと、

「振り盃を受けるは恥辱！」

と、番頭はかっとなりとぼした。盃は飛んで女の長着にふりかかった。

「どうしてくれるの！ 一帳羅を」

これは大げんかにもなりかねないと、まわりが腰を上げた。その時である。

半鐘が頭をたたいて鳴りだした。

半鐘の拍子は火事の遠近をあらわす。一打して間のびしてまた一打、は遠い。しかし、今の鐘はおりたたむようにせていた。酒の入った大番頭の頭には、それすら入らないのか、

「このけんかの景気づけに、半鐘の陣中見舞とは、これまた粹なこと……」

芝居ぶりで、花道ゆく立役者まがい左足一歩前にどんと踏むと、見得を切って見せた。

「なに呑気なこと言っつて、火事だ、火事」

二番番頭の声は低かったが、とがっていた。

「お前さん、飲めない酒で眼にきたか、それとももっと注げとの催促か、この満開の桜が煙に見えようとは。とちるでない、わっはっは……」

派手にひざをたたき、口と眼がくつきそうに大番頭は頭をゆすって笑った。二番番頭はその頭を下からななめにはらいのけて立ち上がった。顔に赤味は失せている。

「なにをする、失敬な！ このわしに手を上げる気か！」

ふり上げた手と共に自分も仁王立ちになっていた。大きく一つ武者ぶるい。太った腹はだぶついて波を打つ。手に持った盃から酒がしたたり落ちる。

そのとき、すそをかき合わせ、正座しなおした山代屋当主、

「番頭！ 火事のようだ」

奥歯に力の入った一声。

「はあっ！」

我にかえった。酒気はむしりとられた。もう腰もふらつかない。こわばらせた首筋の上で眼はしかと、眼下の街道、有松村をなめるようににらみわたした。

「こうしてはおれん！ 風はどっちだ。なに、辰巳（東南）だど？」

辰巳の風とあつては、ことによると、あの火が山代屋の店をも、……そうとつきに思い、こと商売にかかわってくると判断すると、髪の毛までが立ち上がるほど大番頭はしゃんとした。

「一刻も早く、……みな、わかるな！」

焦燥感はいくせない。けつまずいた弁当箱で、白い足袋にしよう油がにじんだ。

「山代屋ののれんに、もしものことがあつては……」

覚悟のことばがほとばしった。

山代屋当主の背筋は変らずのび、「よし」と声も低い。

けとばされた金の蒔絵の重箱から尾頭つきの鯛がとび出し、たおれた一升どっくから酒は泡をふくめまいでもしたのか、ぺたりと女がひとり花むしろに腰をすえて動けなくなっていた。

「置いていくよ、立たないと！」

両腕かりてよろけながらも立ち上がると、風がむしろをあおって女たちの身にまとわりついてよじれた。

「ひゃあっ！」

かん高い悲鳴。めくれあがる小袖の裾を必死におさえて右に左に走った。もつれる舌でことばにもならない。桜の花はさかんに落ちる。さっきまで花芯に集まって女たちをうるさくいじめていたハチは、もうとつくにどこかに身をひそめてしまっていた。

ジャン ジャン！ ジャン ジャン！

ジャン ジャン！ ジャン ジャン！

ジャン ジャ ジャン！

半鐘はかさなる。

二打つづく鐘は大火のきざし。火消し人夫を出せと告げる鐘だ。春の嵐は待ったなし。火は、風にむかつてほえつく獅子の勢いで、有松の本店ならぶ街道を東から西へ、よこつとびに駆けている。

火の獅子は軒先で家のようすをうかがうことなぞしない。間口が十一間もあるうが二間しかなかろうが、紋商の大屋敷であろうが下請職人のちっぽけな軒であろうが、差別なくとびこんでは炎にしていぐや。山代屋連が大番頭の号令にあおられて、こぶしで腰たたきながら引き上げていってしまうと、丘の上は急に静かになった。

享保五年（一七二〇年）四月。

有松村を襲った火事は、全村をなめつくした。その火の勢いと、当時の紋商の身代の大きさを直接語る資料は残っていないが、大火前の村の戸籍をくると、戸数一一一軒、総人口六一〇人、家屋の総数は二四二軒とあるから、火の手の大ききのおおよその見当がつく。

丘をおりて有松に駆けこんだ山代屋はどうであつたろうか。

煙で眼がいたむ。喉はひりついて咳こむ。男子衆の顔は藍つばからはいあがつた青黒さだ。女子衆の髪は乱れ、かきあげるにも櫛もない。山代屋当主はそこに二本の足幅広にかまえ、かぶりふり上げて陣頭に立つ。

「たのんだぞ、火事場の後始末は難儀なことだけだな」

「はあ、大旦那さま」

「これからが勝負や」

「はあ」

番頭は焼けただれた絞りの反物をひろいあげ、涙していた顔をはたとあげて当主を見すえた。

「手のものはなせ！ 灰になってしまったものにこだわるひまに、いかに他人より早く立ち上がるかだ」

「こんな中でどうやって立ち上がれるのでっしゃるか、大旦那さま」

「ころんだのはみいんないっしょ。こっちがけとばさんのにころんでくれた」

「……？」

「もっけのさいわいだ」

「さいわい？」

「山代屋が一番に立ち上がる」

「とは申されても……なにをしたらいいのやら……」

「まず台所へ行って、飯をたかせろ」

「米藏かて焼けてまして……」

「もう見てきている。焼けたのは外側、中の米はだいじょうぶ」



「ほんとに？」

「山代屋の蔵にはまだ、ねずみまで生きとる」

「はあ」

番頭は自分のこぶしで頭をがんがんたたいた。

「すぐに大釜おおがまに火入れて、にぎり飯たの焚き出しだ。村中に配れ。山代屋名入りの手拭てぬぐいつけて出すのを忘れんようにな」

「村中？ そんな大ごと？」

「人は口から、つなぎつけていくんや」

山代屋の蔵だけはこの火の中でも残った。蔵の梁はりはよそとはちがつて見るからに太い。材木の上に白いつくいが塗りめぐらされているからだ。しつこい火を呼よばないし受けつけない。

大旦那の一声で、焼け跡あとにただれた石を集めて仮へついが組まれた。寄りどころを失って呆然ぼうぜんとしていた女子衆おんなごしは、とりつく場を得てにわかに活気づいた。

この日のためであったのか、土蔵どぞうのすみの常滑焼とこなめやきの大つば、その中に貯たくわえられていたひからびた塩漬しほづけわかめは、六年ぶりで水にもどされ、味噌汁みそしるに浮ういた。街道ばたの女たちは、流れる湯気をかぎつけると、甘味あまみに寄りつくアリを思わせて、墨色すみいろの顔で集まってきた。

「さすが大釜の底。山代屋さまならではのことや」

いまだに焼けくすぶり、時折ばちん、とはねる火を足もとで氣遣きづかいながら、人の列はみるみるのびていった。

山代屋は、ころんでもただでは起きない。にぎり飯と汁碗しるわんをもらって一息ついた村の衆しゅうに、山代屋当